

令和 5 年度 板橋区青少年問題協議会 第 1 回専門部会

開催日時 令和 6 年 2 月 22 日 (木) 午後 6 時 30 分～
開催場所 板橋区役所南館 6 階 教育支援センター研修室 B

板橋区青少年問題協議会 第 1 回専門部会 (アプローチ手法検討部会)

出席者

東京家政大学人文学部教授	平戸 ルリ子
教 育 委 員	野 田 義 博
区立小学校校長会代表	星野 由紀子
民生・児童委員協議会	中 道 精 司
NPO 法人 青少年自立援助センター	山 本 依 里 子

出席職員 (幹事)

子ども家庭総合支援センター支援課長	清 水 正 隆
教育支援センター所長	石 野 良 恵

【開会】

- ・開会挨拶
- ・資料確認

【部会長選出】

○事務局

次第に沿って部会長選出に進ませていただきます。板橋区青少年問題協議会要綱第5条第2項第2号により部会長を互選することとなっておりますが、いかがいたしましょうか。

○野田委員（教育委員）

はい。教育委員の野田です。

部会長には、学識経験者であります東京家政大学教授の平戸委員を推薦したいと思いますがいかがでしょうか。

○一同拍手

○事務局

ありがとうございました。ご異議がないようですので、平戸委員に部会長をお引き受けいただければと存じます。平戸委員よろしく願いいたします。

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

こちらこそよろしくお願いいたします。

それではこれより第1回のアプローチ手法検討部会を開催したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、今日はこれまでの皆様が関わられた、もしくはご自身が関わっていなくても、例えば見聞きされたことのある事例やご経験などを、この部会で共有できればありがたいと思います。あらかじめ事務局よりお送りしていたフェーズ資料を基に、ホワイトボードに拡大したものもありますが、自由にこういうところでこういうことがあったとか、こんなことをしたというのを、軽重はあるかもしれませんが順番にお気づきの点などをご発表いただければと思います。その後、皆様の発表後で持ち寄った事例や対応を参考に、どういったケースがどのフェーズに当てはまるかについて、意見交換などをしてしたいと思います。そして、課題点や、より発展させる点などを洗い出していければと思います。また幹事の皆様も、区の出組などで補足説明等がある際には、ぜひよろしくお願いいたします。事例と言ってしまうと非常に重くなってしまうので、ご自身が関わったり、見聞きされたりという程度で結構ですので、こんなことがあって、このように対応していたよ、ということがあれば、ぜひ簡単でも結構ですのでご発言いただければと思います。

それでは、野田委員さんからよろしいでしょうか。

○野田委員（教育委員）

【個別ケース】地域行事への参加を通して登校を再開

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

はい、ありがとうございます。

学校からではない視点でのアプローチの結果、学校に足を運ぶことができるようになったということですね。

後で質疑応答はお時間を取りたいと思います。

次に中道委員さんお願いいたします。

○中道委員（民生・児童委員協議会）

【個別ケース】①根本原因の把握が困難

②支援を拒否する子どもへの関わり方の困難

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

ありがとうございます。そうすると、なかなか難しいところですが、成功というよりも難しかった点に、どちらかという当てはまるような感じでしょうか。

中道委員さんのご発言ですと、特に小学生は明確な通えない理由がわからない、わかりにくいというあたりと、兄弟の影響を受けやすく、いろいろ働きかけようとしても兄弟がどうであるかによって影響を受けてしまうということでしょうか。

それともう一つは、人が来ること、介入されることを嫌がることからアプローチが難しいということがおありだったということでしょうか。

そうすると、フェーズの表で言うと2番の「難しかった点」あたりでしょうか。また、起こしに行かれた、お手伝いをされた中で一時は行けるようになったけれども、続くというのが逆に難しかったというご発言でよろしいでしょうか。

○中道委員（民生・児童委員協議会）

はい。

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

要は、本人は行く気がないとか拒否をしているわけではない部分もあって、何かきっかけや動機付があれば行けるというあたりですね。でも続くかどうかはまた別という点が難しいとすると、やはり2あたりの「上手く言った点と難しかった点」あたりでしょうか。あるいはどう対応したかあたりでしょうか。

それでは、山本委員さんよろしくをお願いいたします。

○山本委員（NPO 法人 青少年自立援助センター）

【個別ケース】評価せずに、肯定的な声掛けによりまなぶーすの継続利用

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

ありがとうございます。

まなぶーすの紹介は、どのタイミングで、どういう形でされていたのでしょうか。

○山本委員（NPO 法人 青少年自立援助センター）

スクールソーシャルワーカーさんは今年度から配置がたくさんされましたよね。スクールソーシャルワーカーさんは全て情報を知ってくださっているの、実際にまなぶーすの常勤職員も直接スクールソーシャルワーカーさんとお顔合わせをして、

情報共有をさせていただいたというのも、特に今年度は力を入れました。そうすると、今年度スクールソーシャルワーカーさんから、新規でものすごいケースが上がってきました。なので、この子課題だとか、休みがちだとか、気になるなというケースが割と早期の段階で今年度特に上がってくるようになったなという印象を受けています。

あとは連携という観点では、養護教諭の先生ですとか、教育支援センターの方が圧倒的かなという感じはします。

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

ありがとうございます。

今ちょうどスクールソーシャルワーカーの方が増えて、繋いでくれるようになったというお話でしたので、星野委員さんの前に、せっかくですので教育支援センターの石野幹事より、その点について補足等があればお願いします。

○石野幹事（教育支援センター 所長）

令和4年度までは、スクールソーシャルワーカー6人、教育支援センターにありまして、校長先生の依頼があつて教育支援センターから派遣をしていました。そこで事例に対して対応していく協議をしておりましたが、令和5年度から6人から11人に増やしました。中学校が22校ありますが、1人で二つの中学校を見るという形で、現場の配置にいたしました。現場に配置することによりまして、すぐに校内相談委員会などに入っていくことができる。そこで課題のあるお子さん、不登校のお子さんに対し、一緒に担任の先生とすぐに訪問したり、いらした時にスクールカウンセラーさんと一緒に面談を聞いたりするところで、その点がすごくスピーディーに対応ができるようになってきております。

先ほど山本委員さんからのお話もありましたが、増えたことによって、区の制度をいろいろと知らないと繋げていけないというところがありましたので、年度の初めにまなぶ一すさんの方に来ていただいて、いろいろと事業のお話もお伺いし、こういう場合は繋がりますかというところで、お話をさせていただいたので、大分密に繋がっているかなというところで、スクールソーシャルワーカーの定例会でもお話を聞いているところです。以上です。

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

スクールソーシャルワーカーさんたちが、まなぶ一すという場とか方法についてきちんと理解をする機会をあらかじめ持つてということが前提ですね。

○石野幹事（教育支援センター 所長）

そうです。

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

ありがとうございます。

そうしましたら星野委員さんから、よろしく願いいたします。

○星野委員（区立小学校校長会 代表）

【個別ケース】①民生・児童委員のお迎えによる登校

- ②スクールカウンセラーによる保護者への粘り強いアプローチ
- ③学校内の居場所における人材不足

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

ありがとうございます。

本日は幹事の清水さんにも、参加していただきましてありがとうございます。お子さんが寝ている状態の中で、親御さんがいない、起こしに行くのが難しいとか、鍵がかかっているのでも子どもがどういう状態であっても入れないというようなケースは実際にありますか。

○清水委員（子ども家庭総合支援センター 支援課長）

支援課長の清水です。

我々も児童相談所になると介入機能というのは当然法的にはありますが、その場合は本当に重篤な虐待が疑われれば鍵を破壊してでもというのは、裁判所の許可を得て行うことはできますが、今のような事例で、そういったことが行使できるかというそれは難しいので、一般的な関わりの中で、朝、鍵を開けられるかというのと、それは開けられないので、ひたすらインターホンを押して起こすように、できることは皆さんと同じようなところまでしかできない。ただ、子どもの現認が全くできていないとか、虐待が疑われたりという場合であれば、アプローチの仕方をいろいろ変えたりすることはあるのかなと思います。ただ、それも不登校とは別の課題の方が大きいというところで我々が動くことはあると思います。

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

ありがとうございます。

先ほど星野委員さんが、教員やスクールカウンセラーの方あるいはスクールソーシャルワーカーの方が、お子さんや保護者と関わる中で、ちょっとしたきっかけをうまく把握して繋げるあたりが、ヒントになるのかなと思います。

【個別事例】本人の課題・ニーズ・興味関心の把握

いろいろありますが、一番難しいなと思うのは閉ざしてしまい、私たちがご連絡をしても向こうから何も返ってこないところにアプローチしていくのは、本当に難しいなと感じています。

それではせっかくおそろいですので、意見交換に入りたいと思います。事務局さんが付箋を貼ってくださいましたが、まずは、それぞれの事例を発表いただきましたので、そのことについての質問でもいいですし、先ほどは話していないとか、足りない部分の補足でも結構ですので、どなたに対してでもフェーズに対してでも、何かご意見等あればちょうだいしたいと思います。いかがでしょうか。

○星野委員（区立小学校校長会 代表）

まなぶ一さんの活動は、小学生は送り迎えがないと行かれないのでしょうか。

○山本委員（NPO 法人 青少年自立援助センター）

西台志村の管轄と板橋のエリアに一つずつ教室を持っていまして、西台教室と区役所前教室があります。志村エリアは平成 27 年度からやっておりますが、区役所前の教室よりも小学生の不登校のお子さんが多いです。必要であれば迎えに行ったり

しています。一応、アウトリーチという形を持っているので、ただそれはまなぶ一すに繋げるためであって、来られなくなった子たちを再度迎えに行って繋いでくるという形でやっています。

あと児童養護施設さんは、確か小学校6年生ぐらいまでのお子さんは、距離や時間によっては送り迎えをしなければならず、どっちの教室に行くかというのが町名で分かれているので、距離的に遠いとその距離は行かせられませんとなります。ただ、本当は西台だったのですが区役所前の教室の方だったら、送り迎えをしなくても大丈夫とのことで、生活支援課さんは別にそういう理由があれば、どちらの教室でもいいですよと言ってくださります。ですので、小さいお子さんだと、近い方の教室に来ていただいていたいました。可能な限りアウトリーチというか、どちらかのみになりますが、どちらでもいいですよと来やすい方に来てもらっていました。そのあたりの配慮はしていました。

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

お迎えというところかなり難しくないですか。関係ができてからになりますか。

○山本委員（NP0 法人 青少年自立援助センター）

不登校のお子さんは、その日行ければ一番いいのですが、まなぶ一すの学習のメインは基本的には5時からになります。同じエリアで決まっているので、同じ学校の子が来る時間帯には来たくないわけです。本来業務時間外ですが常勤職員は勤務しておりますので、2時や3時に来ています。そうすると他のお子さんは来ないですし、常勤の職員は常時いますので、その時間帯だと迎えに行きあげられます。その子一人に対応すればいいだけです。必要であれば迎えに行ったり送ったり、不登校のお子さんだと時間外に来られるので、可能な限り対応しました。また、だんだん時間を遅くして、居場所の方でお友達ができるようになると、学校には友達はいないけれどまなぶ一すだとよくしゃべることから、違う学校のお子さんと仲良くなったりすることがあります。

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

きっかけとしてはお迎えで一人ひとりに張り付けてくれるような職員さんがいらして、そこから次第に夕方のお友達の来る時間帯に自然になじませていくのはいいですね。

他にはいかがでしょうか。

○野田委員（教育委員）

先ほどお話されていたように、どうしても兄弟に引きずられてしまう関係、特に小学校なんかはお兄ちゃんは何らかの事情があって行かないで僕が何で行く必要があるのかということは確かにいくつかの事例でお聞きしていて、面倒くさいというワードもよくお聞きしています。ですが、本当に面倒くさいというわけではなさそう。結局は興味関心が学校に向いていないというのが現実だろうと感じています。

ですので、学校でこういった授業がされているのかとか、例えば土曜授業プランでこういったイベントがされるのかとか、いろいろな教室が開かれたり、様々なことが事務局の皆さんや学校の先生方のおかげで展開されておりますので、学校の魅力をいかに伝えられるかというところが難しいですが、大事だと思います。特別に

人をつけるのは現実的には困難なところがあり、時間がかかる対応ですが、学校で行われている楽しいことをいかに伝えるかというところを、私たちこれから考えていかなければいけないのかなと思います。それによって、学校現場ではいつも変わらないというような認識があるかもしれませんが、やはりそれ一つひとつが考えられた内容になっておりますので、魅力は必ずあるんですね。それをどう伝えるかというところが、私たちの考えるべきところかなと思っています。興味関心というのはその子ごとに違いますので、私たちが興味関心を示さないところであっても何かこだわって取り組むようなこともありますので、例えば中学校だと給食だけ食べに来るような子も見かけますし、小学校中学校含めて様々な空き教室をうまく活用されたりもしていますし、いろいろな方が学校に足を運んでくださっているところもあります。また、ICTを使って個別のタブレットで教室とご自宅を繋いで、学校には来られないけれども家では繋がっているとか、そういう事例もありますので、どうやって選択肢を伝えるかというところが、解決策の一つになるのではないかと思います。

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

実際どうですか。星野委員さん。

○星野委員（区立小学校校長会 代表）

まさに本校の課題からすると、人と繋がれている子でないと育った後に本当に困るので、繋がれる子を作るというのを学校目標にしてもいいぐらいです。繋がる子でないとということが一番課題だと思いますので、本当に民生さんに入っていたいたり、iCS 委員さんにとにかく学校に来てください、声をかけてくださいとお願いもしています。また、発達障がいのお子さんはSTEP UP 教室が満杯で入れないんです。STEP UP 教室の先生は誰でもいいわけではなく、STEP UP 教室の先生こそスキルが必要ですが、それだけの人材がおそらく確保できない。東京都の教員の中で本当に大変だと思います。先生が少ないと言われているくらい自分の学校もないので、STEP UP の先生が充実した方が揃えられるかといったら難しく、STEP UP 教室的なところに入れられないお子さんの待機が多いです。そうすると結局大学まで支援を受けないままいってしまう。STEP UP 教室に入ると、自分の苦手なところを教えてください。スキルで学びながら私はこれが苦手だから、これができないと言える子になって欲しい。STEP UP 教室でこの時は助けてと言える子に育てたいです。けれど、結局ぎりぎりの大学に入るぐらいのレベルの人でも困っている子はたくさんいて、その子が大学で、自分の苦手と言えないという困難に当たるのかなと思います。

発達障がいの子は、苦手だなとか、できないなとか、何か変だなと思ってもやもやしなながら自分で気づくのが4年生ごろなんですね。例えば、書くのが面倒な子にパソコンを使わせることもできますが、みんなは書いているのに自分だけパソコンで写真を撮って終わりでもいいのかとか、そういうジレンマに多分当たるんです。いいんだよと言ってもやはり周りも気になってくるのが高学年ですし、それから学力が低いことも学校に行きたくない理由です。いくら算数を3展開に分けたとしても、1人の子にかかれるわけではなく、ご家庭に余裕があればそういう教室に入ることもできるかもしれませんが、やはり親を支えないといけないというところは抜け出せないながらも、発達障がいがあるのではないかというSTEP UP 教室には上位から入ったら入れない、でも支援しないと将来かわいそうという子はいますので、そこを

何とかしてあげないといけないと思います。学校には頑張って来ているけれど、おそらく勉強がわからないから中学校に行ったら不登校にならないかなという思いです。フェーズでいうと状態0ですが渋っています。それは親が強力に追い出しているか、友達がすごい楽しいから来ているか。友達と関わっていればそれでよくなります。だけれども、苦しい子は学校がつまらないとか友達がいやだとかいろいろ理由をつけますが、今は小学校の先生が関わってあげられますが、それで中学校以降ができるのか。自分から関わられる子に育てていけないといけないかなと思いつつ、この発達障がいがある子は自分から言えない子もたくさんいます。

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

生活のしづらさとかコミュニケーションの取りづらさの、苦しさの理解と、楽しさの発信の両方が必要ということですね。

また、先ほどからご意見の中に保護者のサポートというのも出ておりましたが、例えば物理的に家を早く出してしまうとかありましたが、それが不登校に繋がっているということもありますね。

お子さんの不登校の状態がわかっていない保護者の方も結構いらっしゃいますか。

○野田委員（教育委員）

ほとんどの学校を訪問していますが、学校は不登校の家庭と必ず繋がっています。

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

登校できていないことはわかっているが、親御さんとしてもどう動いていいのかわからない。

○星野委員（区立小学校校長会 代表）

働かないといけないから親御さんは出してしまう。

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

スクールカウンセラーの方は親御さんの話も聞くのでしょうか。

○石野幹事（教育支援センター 所長）

所管が指導室になりますが、親のお話は聞いています。ただ、親の話がメインになってしまい、本来は子どもたちのためであるので、それこそスクールソーシャルワーカーも増えましたし、スクールカウンセラーも区費として来てもらう形で今回増やして、相談室で待つのではなく、スクールカウンセラーが巡回して声をかけるようなアウトリーチ型でやっているという状況もあります

○野田委員（教育委員）

早くもそのあたりは成果が出ているようで、実際にその学校に半分常駐できるという利点を生かしながら、教室を回っていただき積極的に声をかけていただいて、面談の機会に結びついた点など、今回人員を増やしていただいたおかげでできているというお話をいただいています。

○平戸委員（東京家政大学 人文学部教授）

そうすると、どう繋がっていくかの部分が今板橋区としては動きつつあるところで、こちらから出かけていくようなものを、理解して使ってそれを広げていくあたりと、いきなり学校というのが敷居が高い子にはステップとしてまなぶーすさんだったり、いろいろなチャンスを生かしていくことによってそれがきっかけになってというあたりでしょうか。また、親御さんの支援や、そういった環境や家庭の支援もあわせてというあたりでしょうか。あとは、楽しさの発信はまだまだ課題かと思いますが、そうすると、この表を事務局に貼っていただきましたが、どのあたりかと言ってもなかなか難しいですね。またそれについては詰めていくということで進めていきたいと思います。今日の意見は事務局の方でまとめていただいて、今日のところは皆さんの方から一度出していただきましたので、また次回の時に再度これを詰めていくことをさせていただければと思います。

○事務局

それでは、長い時間にわたりご議論いただきありがとうございました。最後に事務連絡をさせていただきます。

本日ご協議いただいた内容は事務局で整理し、次回の専門部会の前に整理内容・今後の検討内容をお伝えさせていただきます。次回の専門部会は令和6年6月の午後6時30分から、場所は本日と同じ教育支援センター研修室で開催を予定しております。日程調整のため、後日ご連絡させていただきますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

それでは、以上を持ちまして、令和5年度板橋区青少年問題協議会第1回専門部会を閉会とさせていただきます。本日はお忙しい中、ご出席いただきましてありがとうございました。